

2015年
11月27日
金曜日

井口 泰 教授（労働経済学）

分断は罪、つながりは恵み

2015年11月13日、フランス・パリでI S（過激派集団イスラム国家）が起こしたテロ事件は凄惨極まりないものでした。事件の一部始終を聞くと、まるで全てが自分の住み慣れた街で起きた出来事のようにでした。

同時に、1917年の同じ日に、フランス軍がシリアのダマスカスを陥落させ、オスマン帝国が崩壊した歴史が想起させられます。フランスとイギリスが、中近東を分割し、今日に至る欧州とアラブ世界の断絶のきっかけとなったからです。

オランダ大統領は、即座にフランスは「戦争状態」にあると宣言し、EU軍は初めて集団的自衛権を発動しました。EU本部のあるベルギー・ブリュッセルでテロの準備が発覚して警戒態勢に入り、EUIJのインターンシップを予定した関学生の渡航も中止されました。

もともと、シリアのアサド政権と反政府勢力との内戦で、多くのシリア国民が犠牲になるなかで、既に国外に600万人以上が出国して難民となっています。

この間、イスラム法を根拠に「カリフ制」を復活させたI Sが、シリアとイラクで勢力を拡大し、欧米諸国だけでなく、世俗化したイスラム教徒まで標的に、世界でテロを拡大しました。2014年秋、アメリカはシリアで限定的な空爆に踏み切りました。昨年のパリの事件以後、フランスやイギリスも、周辺のアラブ諸国を含む有志連合で、I Sに対する本格的空爆を開始しました。欧米と対立していたロシアも、テロへの戦争に参戦しました。

私たちがチャペルに集まっているこの日も、空爆は行われています。空爆は、二重の意味で皮肉な結果を

生んでいることを知ってください。空爆により、シリアの民間人、特に女性や子どもたちや、人道支援を行う「国境を超える医師団」などにまで、被害が拡大しました。その結果、第1に、空爆が難民発生を抑制するよりも、むしろ拡大させる可能性が大きいといえます。第2は、世界中で欧米への強い反感を招き、I Sに参加する若者（移民2世や3世も含む）が後を絶たず、問題になっているのです。

このようななかで、トルコは、200万人以上のシリア難民を抱え、NATOを通じた集団的自衛権発動を拒否しました。

難民の増加を抑制するには、武力による紛争解決より、I Sによる石油の密輸を禁止し、人身取引を含む闇経済の摘発を強化し、その経済的な基盤を崩すことが重要だと思います。

難民の発生の背後には、多くの場

合、戦争や内戦などが存在します。しかし、紛争地帯から逃れてきただけでは難民条約上の難民として認知されず、十分に権利が保護されません。トルコやヨルダンの難民キャンプの経済状態が悪化し、子どもたちが通う学校のない事態が長期化することに対し、今こそ緊急支援が必要です。

本日読んでいただいた詩篇の箇所（第116編）は、私が日々繰り返し読んでいる箇所です。世界は、紛争や対立や差別によって分断されています。分断こそ、まさに人類の犯した罪にほかならないと思います。分断を超えてつながりを生み出す働きこそ、神様の恵みに他ならないのです。分断に直面し絶望しても、悲しみを共有することを通じてこそ、新たなつながりを生み出され、本当の勇氣や明るさが生まれまると信じております。